

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

金子光晴の「バトパハ」—南洋の日本人遺構は今

舛谷 鋭 (立教大学観光学部教授)



バトパハ市内の金子作品にちなんだウォールアート (筆者提供)

反骨流浪の詩人として知られる金子光晴 (1895～1975年)は、20代の欧州行きの後、30代での5カ月に及ぶ海外放浪でジャワ島やマレー半島にも足跡と詩を残している。

当時の南洋(東南アジア)では1942年に日本軍政が始まる以前に、40年に及ぶ民間によるゴム園、鉄鉱業など商業に留まらない日本人移民が居住していた。からゆきさんや商業移民を除く農業関係人口に限っても、大戦前夜でシンガポール・英領マラヤ・北ボルネオを含め8,839人という人口統計がある(原不二夫『英領マラヤの日本人』1986年)。

光晴はこうした南洋移民に画文を売って先への旅費をあがなった。『女たちへのエレジー 南方詩集』(1949年)には「洗面器のなかの さびしい音よ。くれてゆく岬(タンジョン)の 雨の碇泊。」などとマレー語ルビを付した詩作が含まれる。

マレーシア・ジョホール州のマラッカ海峡都市「バトパハ」(光晴表記のまま)が日本語ガイドブックに登場することがあるのは、彼の足跡を『マレー蘭印紀行』(1940年)や『西ひがし』(1974年)に求める文学散歩・聖地巡礼のためだろう。光晴は1930年前後の旅を『マレー蘭印紀行』で10年後、『西ひがし』などの自伝紀行三部作で40年後に語り直し、特に後者は魅力を高めた「創作」と言える。

こうしたマレー半島のコンテンツツーリズムは沢木耕太郎『深夜特急』(1986～1992年)に引き継がれたが、沢木はシンガポールで手にした光晴詩集の「巻末に附された年譜を眺めているうちに、彼が私とほとんど同じような土地を放浪していることを知って、にわかに興味が湧いてきた」(『深夜特急』1巻6章)というから、あえてなぞったわけではないのだろう。

その後も光晴以来の「ユーラシア大陸横断」翻案は、日本テレビ系「電波少年」(1996年)や『深夜特急』の映像、ラジオドラマ化など、現在まで持続している。

バトパハ含むジョホール州の日本人遺構は、光晴も宿泊した旧日本人倶楽部は辛うじて健在で、アートツーリズムの対象としてウォールアートの素材にもなっている。こうした遺構はまだ場所の特定はできるが、現地では南洋移民の記憶は途絶えつつある。例えば、スリメダンの石原産業遺構(2000年からジョホール植物園)のように、なぜそこに鉄鉱業が起こり1985年まで持続していたか、起点である1916年の日本人開拓がすっぱり抜け落ちたまま傳承されている。

地元のマレーシア・タウン・フセイン・オン大学(UTHM)では、南洋移民の記録を含め「ジョホール文化と遺産の研究と革新」(RICHER)プロジェクトとして、半常設の図書館展示「スリメダン、パリスロンの歴史遺産」を行っている。光晴が『マレー蘭印紀行』の「スリメダン 鉄」章で、

やつは、三五会社の雇人夫頭で、わしらのしたにいて、埒もない奴じゃったが、兄貴というやつがぬけめない奴で、それに話して、毛唐の掘りちらしたるうず山を買ったのが、いまのスリメダンですよ。(中略)バトパハとスリメダンの中間にあるパリスロンの駅へ着いた。

と記し、ねぐらのバトパハから通った南洋移民ゆかりの地だ。皮肉にもパリスロンは、その後1942年1月にシンガポールへ進軍する日本軍とオーストラリア軍が衝突し、激しい戦闘で多くの犠牲者を出し、今もオーストラリアでは慰霊の場所として知られている。

これらのパネルは立教大学新座図書館での2025年6～7月の翻訳展示を目指し、若い学生らと共に準備中である。南洋移民から遠くひ孫の代に当たる彼らが、UTHMの主にマレー人学生らと連携しつつどのような感触を得るか、日マ交流の一環としても注目したい。

<筆者紹介>

マレーシア・マラヤ大、シンガポール・南洋工科大客員を経て、26年度にも客員教授として現地滞在予定。観光文学研究とマレーシアなど東南アジア島しょ部の華人文学研究が専門。30年にわたり、中国語圏文学作家のオーラルヒストリー(口述歴史)から翻訳までを手掛け、現地華人社会にも知己が多い。主な共著に『東南アジア文学への招待』(2001年、段々社)、『シンガポールを知るための65章 第5版』(2021年、明石書店)、『マレーシアを知るための58章』(2023年、明石書店)など。